

(続紙 1)

京都大学	博士（地域研究）	氏名	原子 壮太
論文題目	タンザニアの焼畑稲作をめぐる人と自然の関係—ルフィジ川上流域の僻村の事例—		
(論文内容の要旨)			
タンザニア南東部の山村に暮らすバントゥ語系農耕民ベナは、コメを主食としながら焼畑での稲作に特化してきた。本研究では、この地域に存在する多様なイネ品種や自然資源の利用方法に着目しつつ、アフリカの稲作地域における社会—自然—生業の相互関係について論じている。第1章では、タンザニアにおける稲作の歴史を概観し、近年における政治経済の動向を調査地域と関連づけながら研究の背景と目的を示している。 第2章では、調査村の生態・社会・歴史・生業・食文化について概説している。同村はアフリカ大地溝帯の山麓に位置する僻村である。人々は、かつて山間に小さな集落をつくり焼畑で陸稲を栽培していたが、1974年の集村化政策によって居住区に集められ、それ以降、出作り小屋を利用した独自の焼畑稲作を展開してきた。 第3章では、この地域の稲作体系を詳述している。調査地域は農業生態学的に居住区周辺の竹林・湿地地帯と森林地帯に二大別できる。彼らは2年ごとに畑を移動しながら丘陵斜面で陸稲を、湿地で水稻を栽培してきた。この村には多様なイネ品種が存在し、一つの世帯は平均4品種を栽培しているが、同じ品種の連作を避けて品種を毎年入れ替えるなど、この地域特有の農業慣行がある。 第4章では、この小さな地域に50ものイネ品種が存在する意味について、栽培方法・機能性・嗜好性・経済性の観点から分析している。この品種群を生育特性と利用方法で分けると、収量の高い陸稲晩生品種、端境期に収穫できる陸稲早生品種、換金性に優れた水稻（晩生）品種の3つの類型に分けることができる。彼らは各類型の組み合わせを基本としながら、機能や味によって品種を選抜し、また換金性の高い品種を積極的に栽培して食料自給と生計を両立させていた。 第5章では、この品種の多様性がどのように維持されてきたかを明らかにしている。調査村では共同労働や互助労働が盛んで、世帯間の労働格差を平均化して村内のかぎられた労働が効率的に稲作へ向けられていた。労働提供者には食事や酒が振る舞われ、謝礼として粃が配られることもあり、共同労働が新品種や稀少品種の種粃を村内に広める機会ともなっていた。食料・現金収入・労働力といった生活の基盤をイネから得ている調査地域では、各世帯の事情や栽培上の慣習に応えうる多様な特性が求められる。共同労働は種粃の循環を促し、地域社会全体で品種の多様性を維持するのに貢献していた。 第6章では、竹林の形成プロセスとその後の展開について説明している。調査地に自生するタケの開花と集村化政策が同時期に起こったことで居住区周辺に竹林の大群落が形成された。彼らは、伐開や火入れに手間のかかる竹林を避け、遠い森林地帯に出作り小屋を建てて焼畑をするようになっていった。2000年代になると、市場経済の動きが活発化するのにもなって市場価値の高い水稻の栽培が広まり、			

竹林にも焼畑を開くようになったが、陸稲のなかに換金可能な品種が見いだされると、再び森林地帯での焼畑に戻っていった。

第7章では、人々が出作り集落の形成と解散を繰り返す行動様式に着目して、人の移動とイネ品種の循環、また土地利用との関係について考察している。この地域では焼畑を2年で移動し、それを機に出作り集落も移動する。1993年に村は村区（行政区分の最小単位）に分割され、耕作地域にもぼんやりとした村区の境界がつくられていった。出作り集落構成員の離合集散は、イネ品種の循環を促す機会となっていたため、イネの品種は主に村区内で循環していった。一方、人々が頻繁に農地を移動させることで、森林地帯では土地の私有化が起こりにくくなっていた。

第8章では、以上の議論を踏まえ、焼畑稲作を介した人と自然のかかわりについて論じている。調査地域で培われた米食への強い嗜好性は、生態や社会が変動するなかでも変わることにはなかった。主食・酒・菓子・現金稼得・労働力などをコメだけでまかなうには、イネ品種に多彩な形質が求められ、その多様性は頻繁な籾の交換・譲渡によって社会全体で保持されていた。そして、彼らが多様な品種の特性を熟知し、それらを巧みに使い分けることで社会や生態環境の変化に対処してきたのである。一方、近年タンザニアでは土地や資源の私有化がすすんでいるが、調査地域では湿地や森林資源を私有化しようとする動きは見られず、むしろ頻繁に耕地や出作り小屋を移動させることで、土地や天然資源を地域社会で共有・共同利用する傾向性が維持されていた。

(論文審査の結果の要旨)

アフリカにおけるアジアイネ栽培の歴史は古く、とくにタンザニアでは独自の稲作体系や米食文化を見ることができる。近年、タンザニアにおけるコメの消費が急速に増え、水稻が換金作物として湿地などで広く栽培されるようになってきた。一方、山間地域では焼畑で陸稲が栽培されていたが、陸稲は市場価値が低く、その実態がほとんど明らかにされないまま姿を消そうとしている。本研究では、アフリカ大地溝帯の山麓にわずかに残る陸稲栽培地域において、その農耕体系・食文化・品種などを詳細に調べ、政治経済状況・生態環境が変貌するなかで、いかにして陸稲栽培が維持されてきたのかを明らかにしている。この博士論文は、東アフリカにおける伝統的な稲作体系を人と自然の関係を通して総合的に捉えた貴重な研究成果であり、以下の学術的な貢献によって高く評価することができる。

1) まず、タンザニアにおける自給的な稲作体系と米食文化を明らかにした点である。調査対象としたタンザニア南東部の山村では、2年ごとに畑を移動しながら丘陵斜面での陸稲栽培と湿地での水稻栽培を組み合わせた農耕体系がある。この村には多様なイネ品種が存在していて、各世帯は平均4品種を栽培し、同じ品種の連作を避けて栽培する品種を毎年入れ替えていた。さらに、コメを用いたさまざまな調理方法や調理器具・農具なども見られ、タンザニアにおける伝統的な稲作の実態と特性を詳細に記述している。

2) 次に、この村に50ものイネ品種が存在することを見だし、その多様性の意味について栽培方法・機能性・嗜好性・経済性の観点から分析している。この品種群を生育特性と利用方法で分けると、陸稲晩生、陸稲早生、水稻(晩生のみ)の3つの類型に分けることができる。彼らはこの類型の組み合わせを品種選択の基準にしながら機能性や味によってさらに細かく選抜し、また市場価値の高い品種を積極的に栽培することで食料自給と生計維持を両立させていることを明らかにした。

3) また、この多様な品種群が維持される機構についても分析している。調査村では共同労働や互助労働を通して僻村のかぎられた労働力が効率的に稲作へ向けられていた。労働提供者には食事や酒が振る舞われ、謝礼として粃が配られることもあり、共同労働が新品種や稀少品種の情報や種粃を村内に広める機会ともなっていた。食料・現金収入・労働力といった生活の基盤をイネから得ている調査地域では、各家庭の事情や栽培上の慣習に応えうる多様な形質が必要であり、頻繁な種粃の交換や譲渡によって品種の多様性が村全体で共有・維持されていたと考察している。

4) 一方、集村化などの政策が植生や稲作体系に与えた影響を明らかにするために、竹林の形成・地域経済・作付け体系の相互関係を多角的に分析している。調査地に自生するタケについて生態的・形態的特性を詳述しているが、このタケに関する記載はこれまでなく、これがアフリカでの最初の記録となった。このタケが約35年の周期で一斉開花することを見だし、その開花がタンザニアの集村化政策と同調したことで集落周辺に竹林の大群落が形成されたと考察している。その後、竹林での焼畑が試みられていくが、それには多くの労働量が必要であるため、経済状況に応じて補完的に用いられる焼畑と位置づけられていった。彼らの稲作はあくまでも森林での焼畑を基本としていて、竹林の拡大によって遠隔地化した森林に出作り集落を形成し、そこで

の移動耕作が常態化していったことを立証した。

5) 最後に、人々が出作り集落の形成と解散を繰り返す行動様式に着目して、人の動きとイネ品種の循環、また土地利用との関係について考察している。この地域では 2 年ごとに焼畑および出作り集落を移動していて、それにともなう集落構成員の離合集散もまたイネ品種の循環を促す機会となっていた。一方、近年のタンザニアでは土地や資源の私有化がすすんでいるが、人々が頻繁に農地を移動させる調査村では土地の私有化が生じにくく、土地や天然資源を地域社会で共有・共同利用する傾向性が維持されていると結論している。

この博士論文は、東アフリカに残る伝統的な稲作体系を詳細に記録するとともに、豊富な実証データによってその実態を多角的・総合的に分析した貴重な論考であり、アフリカにおける農耕研究に新たな視座を提供するものとして高く評価できる。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成 24 年 7 月 26 日、論文内容とそれに関連した事項について試問した結果、合格と認めた。